

面と向かつて初めて話したのは二年の春学期も末の頃だった。欠席が多かった彼女からだった。

「ねえ」

「ああ、どうも」

「ノート見せてくれない？」

それ以上でもそれ以下でもない。ときたまこの文言を問われては、家に帰ってスキャンした自分のルーブリーフのデータを送る程度。

若干の変化を見せたのは三年になってからだった。ツイッターを眺めると、新しいフォロワーに彼女が居た。ハンドルネームは方々で呼ばれてたあだ名だったので、気づくのにはさほど時間はいらなかった。

——フォローありがとう

既読だけが付いて、一度は終いになった。

彼女は二十を超えてお酒好きのような発言が増えた。新しく買った日本酒の四合瓶の写真や、肴と酒の写真を見ることが多くなった。

小田たつえ

俺自身もある程度飲む性質だったから、対抗するわけじゃないけどツイートをあげるようにしていた。そんな折、たまたま俺の地元の酒を飲んでいることが分かり、リプ返した。

——その酒俺の地元のやつじゃん。美味しいよな

——そうそう。甘口で好き

——ツマミは？

——ない。単品で飲むのが良いかなって。

——多少は胃にもものいれないと後でくるぞ

——大丈夫だって

翌日、二日酔いで授業を受けたらしなかった。

こうして酒の話が出来るやつはなかなかいなかった。これが美味しい、とかこの酒にはこれがアテに欲しいと

か、こんなディテールのある話が出る人が正直欲しかった。いつそ、面と向かつて酒を飲もうかと思った。

「泉谷さん」

ある日の帰りがけに見かけたところを止めた。

「なに？」

「あ、その、今度ほかのやつも連れて酒飲み行かない？」

「いいのお？」

「うん」

「わかった。メンツ決まったら連絡ちょうだいね」

「わかった」

その後行きたいメンツも揃った。そのうちのひとりと話す機会があった。

「お前、泉谷さん誘ったらしいじゃん」

「まあ、最初に声かけたのがね」

「まさかのお目当ては彼女ですか？」

「は？」

「だってアイツこの学科じゃ群抜いて目鼻立ちいいしなあ」

「そういうわけじゃ」

「お持ち帰り考えてんのか？」

「ばか、なわけあるか」

「まあでも、泉谷さん相手いなさそうだしワンチャンあんじゃないの」

「そういうつもりは一切ない！」

「んだよもったいねえ」

ただ酒が飲めればいい。ちょっと愚痴でもお互い洩らして楽しく飲めれば良い。

全員の予定が空き、逆に授業の事を考えれば早いに越したことは無いとなって飲みは九月の末に決まった。

駅前集合した。彼女は白のワンピースに小さな鞆だけ持ってきた。全員が集まりやすい場所を考えて、彼女の最寄り駅が一番いい、となった。

一軒目。彼女も俺もトップスピードで飲み始めた。他が二、三杯でいい気分であるところを俺と彼女だけ飲み続けていた。七杯目で限度が少し近づいた感じがしてスピードを緩めた。彼女は六杯目だった。

「結構飲むんだね」

「こういう時にはね」

気づくと十一時半を廻っていた。他のメンツが終電の関係で帰り始めた。結局、三駅で帰れる俺と最寄りの彼女だけが残った。

「帰っちゃったね」

「まあ、仕方ないよな」

黙々と酒の飲み口に口をつける。

「……誘ってくれてありがとう」

「ううん。こんなに飲めるひとほとんど今いないから」

「や」

「だね。女子じゃもつとこないよ。こういう場くらいじやないとこまで行かないし」

「気疲れするよね。他と合わせると」

「わかる」

結局飲みつづけた。八か九杯だったはず。彼女が七か八杯だった。ラストオーダーの声がかかった。

「どうする？」

「もつと遅くまでやってる店あるけど、行く？」

「……うん」

最後に飲み終え、お互い千鳥足に近いような感じで数分歩いた。電灯の暗い、そんな店だったことだけ覚えてる。テーブルに通され、対面で座った。

「ね」

「ん？」

「タバコ、いい？」

「え、ああ」

ピアニツシモのペヴェル。ピンクのパッケージが眩しかった。

「吸うんだ」

「まあ、仕事柄」

「……つていうと、接客とか？」

「まあね。誰にも言っていないけど」

「言えるはずないよな」

「初めて言った」

「そりやそうだよな。俺もいい？」

「吸うんだね」

「まあ少しだけけど」

ピースライトを取り出す。一本啜えて火を探す。

「点けたげる」

「いいよ」

「気にしないで」

BICのライター。一吸いをくゆらせ、吐き出す。

「ありがとう」

「職業病なのかも」

「いいと思う。好感度あがると思うし」

「そうかな」

頼んだサワー二つが来た。

「あれ、カナエちゃんじゃないの」

「ご無沙汰です」

「お連れさんがいるとは珍しい」

「大学の同期です」

軽い会釈。

「いつもはあそこのカウンターなんだけどね。んで日本酒結構飲んで帰るんですよ」

指さす先のカウンターは、たしかに時々ツイートで見える背景だった。

「いいですね。こんな子が飲みに来てくれるなんて」

「ほんとですよ。お酒は飲むし話ほうまいし」

「店長さん……」

微笑む彼女。

「んじゃ、ごゆつくり。閉店して少しくらい嘖いても大丈夫なんです」

「どうも」

周りを見やる。誰も客がいない。もう遅い時間だ。日付を越えたばかりだった。

「明日大丈夫なの？」

「え？」

「仕事。俺はとくに何してるわけでもないからいいけど」

「私も明日は空けてある」

「そっか」

「……あのおさ」

「なに？」

「……あたし、学科の中で下半身ゆるいとか言われてない？」

突拍子も無い事を言われたものだ。

「は？」

「いやちよつとその、気になって」

「は？」

「……別に何も言われてないけど。少なくとも俺の周り」

「は」

「そ」

「どうして急に」

ことの顛末はこうだ。少し前から同期の女子からはぶられていた気がしていた。なんとなくその理由を探っていると、自分が「そういうこと」をなりふり構わずしているらしいとの噂が立っていた。もちろん誤解だと言っただが、誰が言い始めたか分からない。二年の頃から休みがちだったのはそういう陰口に耐えられなかったからだという。自分がそういう職に就いてるからなのかもしれないが、それでも誤解でここまで来るとは思っていなかったらしい。

俺は閉口するしかなかった。なにせ職も含めて何も知らなかった。あいつが言っていたのもそういう影響だったのかもしれない。

「……事務室とかそういうところには言ったの？」

「一応。でも返答ないし」

「……俺だけじゃどうしようもないしな」

「あたし、それからに逃げるようにしてお酒にすがってさ。飲み始めて好きなのは変わらないけど、逃げるための手段になってるっていうか」

「……そりゃそうなるわな」

「だから、久しぶりに何も考えなくて飲み続けてるんだ

よね、今日」

「……いいんじゃない？」

「え？」

「単に逃げるための手段になってるんじゃないかって、楽しく飲めてるって感覚。それが大事だと思っただけだな」

「少しだけ、彼女の頬に酔いのせい以上に赤みが増した。」

「……もう少し、飲んでもいいかな」

「飲み過ぎはいけないよ」

「今日は良いの」

「サワーの酸味が緩み、甘味が増した気がした。」

結局一時過ぎまで店にいた。さすがに出ようと言って支払いを済ませた。無論、帰る電車はとうに消えていた。

「タクシー取って帰るよ」

「うん」

「じゃ、気を付けて帰れよ」

「ありがと」

「一台を見つければ、後部座席に向かう。」

「ねえ！」

「ん？」

首に腕を回される。正面から、唇が触れた。

「ありがとね。また飲もう」

「……ああ」

後部座席に座り、住所を言う。ハイ了解です、でドアが閉まる。彼女は立ち尽くしていた。にんまりとして赤らんだ顔だった。少し手を振る。酔いのせいで彼女が返した振る手は大振りになっていた。

帰路の最中で酔いは冷めていった。火照りが消えるなか、浮いたような記憶は貼り付いて離れなかった。

《あとがき》

小田たつえです。ご無沙汰しております。今回の作品は自身では正直流れが微妙な感じがしていますが、いろんなことを詰め込んだ本作を楽しんでいただければ幸いです。

私が寄稿できる機会ももう数少なくなってます。中根もどうにか長編の人物たち最後まで記録しきるメドを立てたらしく、読者の方々におかれましては何卒もう少しお待ちくださいますようお願いしております。それでは。

二〇二二年一〇月八日